書評

谷川稔著『フランス社会運動史 アソシアシオンとサンディカリスム』

川越修

I

本書は、職人組合の解体からアソシアニスム、サンディカリスムへと繋がる一九・二〇世紀フランス社会運動史を跡づけた、著者の一〇年来の仕事をまとめたものである。個々の論稿を貫ぬく共通の課題は、「序章」の表現を借りれば「自前の労働社会」を拠りどころにその「労働の場における「近代化」」、すなわち労働者の自律性の喪失過程に「頑強に抵抗」し続けた職人や労働者の運動と、そのなかで育くまれた思想を検討することに置かれている。

こうした課題設定の狙いや本書の各論文の依拠した資料については、かつて著者が喜安朗氏の著作（『民衆運動と社会主義――ヨーロッパ現代史研究への一視角――』勁草書房、一九七七年）に対する書評に書きとめた、次の一文から読みとることが許されよう。すなわち著者はそこで、「私たちは同時代に生きた人間がルポルタージュを描くように歴史を描く必要はなく、むしろ同時代のルポルタージュやメモワール、さらには諸々の調査記録・新聞・パンフレットの類から、ある個人や集団、社会、時代などの特質をつかみ出す醒めた作業に任務を限定しておくべきではないだろうか」（『史学雑誌』第八七編第七号、昭和五三年、八〇頁）と述べている。

こうした著者の基本的立場には、我国の歴史学会でも市民権を獲得したと言われる「社会史」研究が、各論者の意図はともかく、読み手の側の「路地裏」、「舞台裏」への関心を満たす、あるいはそうした関心を新たに喚起するという意味では成果を挙げながら、舞台裏と表舞台を繋なぐ回路を十分解明しえていない現状に対する批判が込められているといえよう。ただ著者のこの批判の背後には、社会史、あるいはより限定して言うならば、喜安氏をはじめとして、同人誌的色彩を強く持つ雑誌『社会運動史』に集まった研究者の仕事への共感と、それに同化することをためらう著者自身の歴史感覚のせめぎあいのようなものが伏在しているように思われる。そしてこのせめぎあいを一つのバネに、著者の歴史感覚を対自化する作業の積み重ねが本書を生み出したのではなかろうか。

フランス社会運動史については全く門外漢の私が本書の書評を試みたのは、同世代に属する著者のこうした研究の歩みに大きな関心を抱いたからであり、さらにまた、本書のために新たに書き下された論文（第一章）等を通して、「近年「社会史」という形で称揚されている視座の一部と意外に近い」立場に立つに至ったという著者の「中間的総括」（「あとがき」三七四頁）を私なりに

理解してみたいという思いに駆られたからに他ならない。

従って以下では本書の内容紹介は極力省略し、また本書の対象領域の個々の事例に即しての論評は他の専門家による書評に委ねることにし、専ら私なりの読後感を書く形をとることを予めお断りしておきたい。なお以下の論評にあたって、私は本書を読む作業の力点を、著者が「あとがき」に記している「近代の工業化社会の歴史をどういった角度から読みかえて」いくか（三七四頁）という論点に置いた。というのも、この点が現在の歴史学に課せられた重要な共通課題の一つと思われるからである。

Ⅱ

本書に収められた九論文は、対象時期・テーマにより次の四つのグループに分かちうる。

㈠　七月王政期から二月革命期（第一、二章）。この時期のテーマは職人共同体の解体に伴う職人組合の衰退過程と、それに代る職人的労働者の新たな結合形態としてのアソシアシオンである。

㈡　第二帝政期（第三、四章）。ここでは二月革命の挫折後、共和主義的政治への絶望のなかで模索された「労働者主義」の「対自化」の試みが、プルードンの思想、プルードン主義者の活動との関連で検討されている。

㈢　第三共和政期（第五、六、七章）。ここでの課題は「社会のあらゆる相におけるブルジョア的統合」が進むなかで、「労働者主義」に依拠し独自の「対抗社会」を形成しながら、それ自身第一次大戦後の「労働社会の「近代化」」の進展、ボルシェヴィスムの浸透のなかで動揺するサンディカリスムと、その理念の解明にある。

㈣　第三共和政末期（第八、九章）。この両論文の狙いは、一九世紀から二〇世紀にかけてのフランス労働者の「労働者主義」を支えた「労働社会」の最終的な解体のもたらしたものを、工場占拠運動とシモーヌ・ヴェイユの思想の検討によって掴み出す作業を通じて、「労働者主義」の歴史的、現代的意味を明らかにすることに置かれている。

これらの各グループの論文は、その執筆時期から言うと㈢、㈡、㈣、㈠の順序で書かれているが、こうして改めて時代順に並べられることにより、著者なりの一貫した視角から切り込んだフランス近代史の一断面を鮮明に呈示しえたと評価できよう。この点を確認したうえで、以下本書の各論文を執筆順に検討してゆくことにする。

Ⅲ

まず一九世紀末から一九二〇年代にかけてのサンディカリスムの生成、展開過程を分析対象とした㈢の諸論文をみよう。これらの論文を貫く著者の基本的視点は、「サンディカリスムという運動に体現されたさまざまな志向」を「思想態として把握」すること（一七五頁）に置かれている。著者のこうした視座設定には、「レーニンやマルクスとの距離によって社会運動の革命性を測ろうとする従来の史観」（二一一頁）への、さらにはその結果サンディカリスムが「思想史の裏街道を歩みつづけることを余儀なく」（二一三頁）されてきたことへの批判が込められている。つまりこれらの論文が目指しているのは、かつて良知力氏が『マルクス

と批判者群像』（平凡社、昭和四三年）の「あとがき」で用いた表現を借りるならば、サンディカリスムをめぐる様々な思想、運動の〈Rettung〉（救出）作業であるといえよう。

とすると直ちに問題となるのは、この「救出」作業が著者の目指す近代工業化史の再解釈作業にどのように繋ってゆくのかという点である。この点についていうと、著者のサンディカリスム論は概して、現在の思想・社会運動状況への著者の批判を歴史分析の対象に仮託し語らせるという側面が強いとの印象を受ける。「少なくともサンディカリスム的契機を欠いた社会主義や革命運動は、今以上に抑圧的な社会を生み出すだろう」（二三六頁）といった文章で表現されている問題意識を持つこと自体の当否が問題なのではない。問題はこうした一定の視角からの「救出」作業という面が強く出すぎることによって、著者が最終的に目指そうとする「近代の工業化社会の歴史の読みかえ」作業との繋がりが不鮮明になっていることにある。具体的にはそれは、著者のサンディカリスム分析の「思想構造論的な視座」（二四〇頁）という表現に対比していえば、サンディカリスムを生み出した社会構造、言葉をかえればアルマンストやサンディカリストの生きた世界、とりわけ彼らの「自前の労働社会」の具体像の解明作業の稀薄さとなって現れている。

むろん著者はこの点について無自覚であるわけではなく、この問題点は、「従来の史観からサンディカリスムを解き放つためには、同時代の横軸よりもむしろこの縦軸すなわち一九世紀フランス社会運動の「土着的基層」を貫く「通奏底音」の史的解明に照準を合わせる必要がある」（二一一頁）という積極的な主張の、いわばメダルの裏面にすぎないともいえる。しかしながら、同時期の英独仏三国の労働運動のあまりにも類型的な把握、つまりイギリス＝トレード・ユニオニズム、ドイツ＝「政党に主導される労働立法志向型の運動」、フランス＝サンディカリスム（九一頁、二二四頁、他に一三三頁の記述）という把握にたびたび出会うと、やはり社会運動史・思想史の分析には「縦軸」のみならず「横軸」の分析も不可欠だと考えざるをえなくなる。著者自身がこの「横軸」という表現で何を考えているのかは必ずしも明らかではないが、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけ何れも大きな転換点にあったこれら三国の労働運動（ホブスボームの言うイギリスの「レーバーズ・ターニング・ポイント」、ドイツにおけるベルンシュタイン問題や大衆ストライキ論争、そしてフランスのサンディカリスム）を横の連関で考えてみること、あるいはそうした問題意識を持って各国の事例をめぐる「横軸」の解明を試みることは、社会運動史の分析から近代史像の再検討に進むための一つの重要な基礎作業となろう。

さて次に著者の「縦軸」を溯って上述の㈡にあたる論文をみることにする。ここでは、一八四八年革命の挫折により「アソシアシオンとネオ・ジャコバン主義的な政治革命との安易な結合」（一〇二頁）のはらむ矛盾につきあったフランスの労働者の運動の「再生過程」が分析されている。考察の対象となっているのは、「産業帝政」下のアパシー状況の下で、「政治的代行主義」を拒否し、「現在の抵抗手段である労働組合が未来社会の核となる」（一三三頁）とするヴァルランの「社会革命論」がいかにして生まれたか、後のサンディカリスムの「下地」を作ったこの時期の

運動とブルードン主義との関係をどのように捉えるかという問題である。

ここでは㈢の論文についての論評との関連で、この時期の思想・運動の展開のなかで「パリの労働者のミリュー」の果した役割が強調（一〇九頁以下）されている点に注目しておきたい。そのミリューは、四八年から第二帝政下の時期の大工場と小アトリエや家内工業の並存、多様な労働者類型の「混在」にも拘らず存在した、「都市独得の一体性にもとづく意識の近似性」（一一〇頁）として捉えられている。他方、「ブルードンとサンディカリスムとの思想的位相のへだたり」（一七一頁）の論証に際しては、この「へだたり」を埋めたファクターとして、第一インター・パリ支部に結集したミリタンらブルードン主義者の運動と並び、「ブルードンの生きた世界」と「世紀末の労働者を取りまくミリュー」の共通性（一七二頁）が挙げられている。

となるとここで生じる疑問は、以上の引用は著者が一九世紀半ばから世紀末にいたる「労働者のミリュー」の同質性を頭に描いていることを予想させるが、果してこの問題に判断を下す予備作業なしにこうしたイメージを持っていいのかという点にある。著者自身はこれらの論文では「社会史的分析」そのものは主題ではないとして、この問題を詳しくは論じていない。しかし「労働者のミリュー」を論ずるには、労働者類型の問題に即していえば、少くとも異った労働者類型の混在の仕方、その歴史的変化といった点にもっと注意を向けておくべきだったのではなかろうか。この疑問は、本書全体を通じて「労働の場における「近代化」のプロセス」が「序章」の表現を借りれば、労働者の「生産工程の主体から労務管理の客体への」転落過程、「市民主義」が「労働者主義」を駆逐してゆく過程」、「社団的もしくは身分制的価値体系に市民法的価値体系がとってかわる過程」としていわば二分法的に捉えられ、一九世紀中葉から二〇世紀にかけての時期が、一九三〇年代にこの「近代化」の最終的に勝利するまでの過渡期として一括されていることの是非とも繋がってくる。

以上で指摘した著者の方法への疑問は、一九三〇年代のサンディカリスムの解体を扱った㈣の二論文からは余り感じとれない。それは一つにはこれらの論文が、「生産者意識にもとづいた労働者主義とでも形容される心性」に支えられた「直接行動型のサンディカリスム」（三一〇頁）が、テーラー・システムに象徴される「工場で進行していた生産工程の変化」（同）の「過程」においてではなく、著者の択え方によるその最終局面で直面した状況が分析の対象とされていることによる。さらに、人民戦線内閣の誕生を待つ政治的空白期に展開された「祝祭」としての工場占拠が、結果としてCGTの「交渉型の「大衆的」労働組合運動への移行を促進」（三〇九頁）し、「ヴァカンスという「夢」が工場占拠という「祭」のエネルギーを吸収し、生産点における課題の追求を阻害」（三一二頁）することとなった等々の指摘が、この時代の現代との時間的近さもあってアクチュアルな面白さを与えている点も挙げられよう。

とりわけ、サンディカリスム解体の背景となった「労働社会における「近代化」のプロセスを目のあたりにし、その意味を限りない哀惜をもって考察しつづけた思想家」（一三頁）シモーヌ・ヴェイユを扱った論文は、彼女を「同時代の諸相においてとらえ

返す作業」（三一九頁）と、著者自身の現代的問題関心の結合から生まれた、本書のなかでも読みごたえのある論文であった。

Ⅳ

以上述べてきた私の論点をここで一端整理しておこう。本書の各論文をその執筆順に従って読みつつ私が感じた問題点は、まず第一に、思想史・運動史研究における「救出」というモチーフと、一定の歴史像（ここでは具体的には近代の工業化社会像）の再検討はどのように繋がるのかという問題、第二に、一九世紀を通じて「労働社会の「近代化」」に抵抗し続けたフランスの労働者を支えた「労働社会」の実態、その歴史的変化の解明の必要性、そして第三に、ヴェイユのような一人の思想家ではなく、社会集団あるいは社会運動のなかで「生きられた思想」を分析する方法を練りあげるには、パリのような個別具体的な生活空間に密着した事例研究が不可欠ではないか、という三点に要約しうる。

最後に取り上げる(一)の二論文は、私にはこうした問題に対する著者の一つの解答として非常に興味深いものであった。まず「二月革命期のアソシアニスム」を扱った論文では、著者の社会運動史・思想史の基礎視角が、「何らかの社会理論が時代を規定するには、二次的な集団や個人に媒介されざるをえないのであり、むしろそうしたマイナーな担い手たちの試行錯誤の中にこそ、時代の直面した課題がなまの形で現われる」（五九頁）という文章にまとめられている。この二論文に即して具体的にいうと、「マイナーな担い手の試行錯誤」とはコルボンやアトリエ派のアソシアシオンをめぐるそれであり、モローやペルディギエによる「職人組合改革論争」を指している。また七月王政期から二月革命期のフランスの「直面した課題」とは、「産業革命の本格的進行」に伴う、「既存の労働の世界、民衆の世界を構成する枠組み」の「根底から」の動揺、「職人的労働を軸とした人的結合関係の組み替え」、「家族関係の根本的改変」、「公教育の再編」などの問題（六八頁以下）である。

自ら「労働の世界」に生きたペルディギエやコルボンらの筆を借りて描き出された職人組合の実態や「パリ民衆のマンタリテ」は、本書の他の論文に比してより具体性を帯びたものとなっている。ただあえて注文をつけるとすれば、これら同時代人の残したパンフレット等の印刷資料の資料としての限界についての配慮が十分になされていないように思われる。つまりペルディギエやコルボンが経験し叙述した「労働の世界」がどこまで一般性を持つものかという疑問が残るのである。この問題を考えるには、本稿の冒頭に引用した一文で著者自身があげているような幅広い資料、とりわけ本書の四八頁に注として掲げられているような同時代の社会統計資料のより緻密な検討が不可欠であろう。

ところで、一八四八年革命前後のヨーロッパ諸国、より正確には諸都市の労働者の実態はどのようなものであったかという点にかかわる著者へのこうした疑問は、一九世紀ヨーロッパ史に独自の視点からアプローチし大きな反響を呼んでいる最近の諸著作についても多かれ少なかれ感じられる問題である。ごく大雑把に言うと、喜安氏の著作（『パリの聖月曜日――一九世紀都市騒乱の舞台裏』平凡社、一九八二年）については、都市の病理現象を描く際に用いられる「労働者や貧民層」、「都市貧民層」といったタ

ームと、酒場やストライキを論じる際の「手工業的熟練を持った労働者」などのタームのずれが気になる。また良知氏が『向う岸からの世界史――一つの四八年革命史論』（未来社、一九七八年）で取りあげた「プロレタリアート」は、当時の少数民族問題と重ね合わされることにより、ヨーロッパ近代社会にいわば外から批判をつきつける存在として位置付けられ、我々の近代ヨーロッパ史像に再検討を迫る一つの有効な作業仮説概念となっているが、当のウィーン内の職人や労働者は、これら「プロレタリアート」との対比で「特権的労働者」として描かれるに止まっている。

ここにあげた問題を考え、さらには社会史、社会運動史の領域から近代ヨーロッパ史像の再検討を進めてゆくには、最近の柴田三千雄氏の著作（『近代世界と民衆運動』岩波書店、一九八三年）がイギリスの事例について指摘する、産業革命前夜の「都市民衆」の「多様性」、産業革命による「「民衆世界」の変容」過程の中に現われる「民衆＝労働者」の「非均質」性、さらにはその非均質的な諸層の絡み合い方を、各国レベルの「発展段階」のずれの例証としてではなく、パリ、ロンドン、ウィーン、ベルリンといった首都や他の諸都市のレベルでひとまず共時的に比較する作業が必要となるのではなかろうか。

V

以上、フランス近代史には全く門外漢の一読者として本書との対話から得た感想を思いつくままに書いてきた。その結果、「フランス社会運動の思想史的考察」を目指した著者の意図からずれた所でのないものねだりに終始することになったが、それはあくまでも私が本書から受けた刺激の大きさによるものであることを、最後に蛇足ながら付け加えておきたいと思う。

フランスの労働者の「労働の場における「近代化」」への抵抗の軌跡を「縦軸」に沿って追った著者の視野は、著者のいう「中間的総括」の地点に向けその幅を着実に広げてきた。だがそこから「近代の工業社会の歴史の読みかえ」に進むには、すでに指摘した問題の他にも、例えば労働者の「ブルジョア社会」への統合、それも単にとり込まれるという意味に止まらず、自ら入り込んでゆくという意味での統合の問題など、検討すべき課題は多い。著者の「中間的総括」地点からの更なる前進を期待したい。

（B6判　三八二頁　一九八三年五月　山川出版社　二八〇〇円）

（同志社大学専任講師　　）